



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あとがき
Author(s)	原, 暉之
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1335-1344
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28217">https://hdl.handle.net/2115/28217</a>
Type	other
File Information	hokudai125yr_tsusetsu_1335.pdf



## あとがき

本書『北大百二十五年史』通説編は、その別冊として編まれた論文・資料編（二〇〇三年三月刊行）とともに『北大百二十五年史』全二冊を構成し、既刊の小史『北大の125年』および『写真集北大125年』（それぞれ二〇〇一年三月および十二月刊行）に続き、北海道大学創基一二五周年記念事業の一環として北海道大学百二十五年史編集室以下、年史編集室）が関わった一連の出版企画のうち、最後の刊行物となる。

本書は、札幌農学校以来の北海道大学の歴史を全体として通観する第一部「通史」と、大学を構成する部局（学部・研究科・研究所・センター等の単位組織）ごとの個別史を束ねる第二部「部局史」からなり、第一部は創基から最初のほぼ一〇〇年間を扱う第一編、次いで一九七〇年代から八〇年代にかけての大学の拡充期を扱う第二編、一九九〇年代から二一世紀の初年にかけての大学の再編期を扱う第三編、さらにキャンパスの変遷に焦点を絞って通史を記述する第四編の四部分に分かれている。

このような構成をもつ沿革史出版の全企画、とくに最後の刊行物となる本書の企画を具体化するに至るまでには、学内に総長を委員長とする北海道大学創基百二十五年周年記念事業実行委員会が組織されて以来今日までほぼ六年間の歳月が流れている。最後の刊行物の編集終了をもって年史編集室を閉じるに当たり、この場を借りて編集の経緯と関係者への謝辞を記しておきたい。

北海道大学は創基一二〇周年記念式典の挙行（一九九六年十月）後、二〇〇一年に迎える創基一二五周年を次の節目の年に設定し、一九九七年五月に北海道大学創基百二十五年周年記念事業計画委員会を置いて、記念事業の輪郭について検討に入った。「計画委員会」が「実行委員会」に発展的に解消され、同時に附属図書館長を座長とする

「百二十五年史世話人会」が発足したのは同年十二月である。

「百二十五年史世話人会」は一九九八年三月末までに五回の会合をもち、すでに「計画委員会」において創基一二五周年記念事業の個別事業の一つに挙げられていた年史編纂について、その基本事項、実施体制、編集組織、基本方針の原案作成を検討した。検討の結果、一二五五年史の編纂に当たって、創基から一二五年のうち最初の二〇〇年分についてはすでにある『北大百年史』を要約する形で活かすことにし、主としてその後二五五年分を増補することに力を注ぐことが妥当であろう、という基本方針案が固まった。具体的には、通史・部局史・基礎資料（規程・式辞・統計・年表等）を一卷にまとめた『北大百二十五年史』、北大の一二二五年と二二世紀への展望を中心とする論文集として『北大百二十五年史・別冊』（仮題）を刊行すること、通史のページ配分としては、一〇〇年分の要約と二五五年分の増補との比率を「一対二または一対三程度」とし、「部局史についても同様」とすること、以上二点の体裁は「A4版またはA5版」とすること、ほかに、『写真集北大百年』の改訂版としてA4版の『写真集北大百二十五年』（仮題）と小冊子『写真で見える北大百二十五年』（仮題）、新人生に読みやすい新書版の小史『北大の近代』（仮題）の三点も刊行することとし、さらに刊行の形態として従来タイプの冊子体のほか、CD-ROM版も作成する、とした。編集の期間としては、九八年度から発足し、最大五年を目標として編集にあたり、記念式典の挙行を予定する二〇〇一年秋までに小史と小冊子を刊行すること、写真集も同年刊行を目指し、『北大百二十五年史』と『北大百二十五年史・別冊』は二〇〇二年度刊行を目指す、との方針が立てられた。

「百二十五年史世話人会」の方針案は、一九九八年四月の「実行委員会」、評議会です承された。これをうけて同年六月に「実行委員会」の下部組織として「出版等専門委員会」が設置され、同年十月には後者の下部組織として年史編集室が設置されて、実質的な編集体制が発足した。

「出版等専門委員会」は、編纂の基本方針と実施上の重要事項を審議するほか、部局間の連絡調整をその任務と

していた。部局の区分け、部局史のページ配分は同専門委員会が審議・了承された案に基づいている。

年史編集室には専任の編集員と編集補助員が勤務し、執筆要項の策定、基礎資料、写真資料の収集・整理を行い、刊行物ごとに「専門編集班」を組織して、それぞれの構成や内容について検討するとともに、大学史研究会を企画し、諸大学の大学史料室等と交流するなど、大学史研究の全国動向についても勉強を重ねた。

年史編集室は、「実行委員会」と評議会で全学的に了承された大枠に沿って編集の実務を進めたが、編集作業の途上で一定の軌道修正をはかった箇所もあった。まず、写真集と小史について当初の計画では、『写真集北大百年』の改訂版、一二五年の歩みをスケッチする小史（新人生に読みやすい新書版）、小冊子『写真で見る北大百二十五年』（仮題）を作成する予定であった。軌道修正をはかったのは、これらのうち相互に重複する関係にあるとを合体し、写真も豊富に取り入れた小史『北大の125年』に一本化したことである。この修正は、一九九九年十一月の「出版等専門委員会」幹事会を経て、二〇〇〇年一月の評議会です承された。

また、本書『北大百二十五年史』通説編は、当初の計画では通史・部局史・基礎資料を包含し、別に論文集を単独の一冊（『北大百二十五年史・別冊』）とすることが予定されていたが、両巻のページ数の極端な不均衡を回避するという技術的な事情もあって、基礎資料（規程・式辞・統計・年表等）を通説編から別冊に移し、別冊は『北大百二十五年史』論文・資料編とすることに決定した。通説編についても、創基から一〇〇年分を要約する第一編、これを増補する二五年分の前半部分を扱う第二編、後半部分を扱う第三編から構成する当初の構想に対して、キャンパスの変遷に焦点を当てる第四編を付加したのは一つの修正であるが、これは『写真集北大125年』の編集作業を通じての校舎配置図など新資料の発掘、その分析からえられた新たな知見の所産である。本書通説編及びその別冊をなす論文・資料編の体裁は種々議論のあったところであるが、結論的には『北大百年史』全四巻という先行者のスタイルを踏襲するという観点からA5版に落ち着き、題字も『北大百年史』を継承した。先人への敬意とその精

神を継承したいという願望は、『写真集北大百年』と『写真集北大125年』の関係についても同様である。ただ、『北大百年史』の当時には想像すらできなかった刊行形態も採用されている。それは、本書に付した一枚のCD-ROMである。本書通説編の通史と部局史、論文集・資料編の基礎資料（歴代学長・総長および部局長等、式辞等、学内規程等、統計、年表）を収録し、これによりキーワード検索も可能である。

当初の計画からやや外れる結果となったのは、刊行物の出版時期である。当初、小史と小冊子の刊行を二〇〇一年秋までに刊行することを予定して編集作業を進めたが、結果的には両者を合体した『北大の125年』を同年三月に刊行する運びとなった。二一世紀最初の入学生に編集室の活動成果を直接届けることを念頭において、一部計画の前倒し実施をはかったのである。二〇〇一年度に入って編集室の活動は写真集の編集が予想外に大きな比重を占めるようになり、その刊行に漕ぎ着けるには、事実上二〇〇二年の年明けまで長い時間を要した。その関係で『北大百二十五年史』通説編および論文・資料編の二冊の編集が本格的に着手されたのは二〇〇一年度末となった。「二〇〇二年度刊行を目指す」という当初計画の期限内実施は困難となり、編集室で担当した作業量が当初の想定を大幅に上回ったこと、その他諸般の事情によって、二〇〇三年度刊行とせざるをえなかった。この遅滞については、記念事業全般についてご支援をいただいた「北海道大学創基百二十五年周年記念事業後援会」の関係者をはじめ、同窓生、名誉教授の先生がた、学内の教職員の関係各位、とくに学内にあつては部局史の編集・執筆に多大の労力を割いて期限内に原稿を提出して下さった各部局編集委員各位に対し、深いお詫びの意を記しておきたい。

企画段階からの長い経過のなかで、本書の刊行をもって一二五年史の編集作業を終了するまでには、数多くのかたがたに多大のご指導とご協力を仰いだ。

とくに、全国の大学でそれぞれに大学史の研究・編纂に携わってこられ、本学の進める一二五年史の編集にさまざまな角度から有益なご助言を賜った先生がたとして（以下敬称略、順不同）、寺崎昌男（桜美林大学大学院国際

学研究科)、故・中野実(東京大学史料室)、西山伸(京都大学文学部)、新谷恭明(九州大学大学院人間環境学研究院)、折田悦郎(九州大学史料室)、永田英明(東北大学史料館)、中川学(同大学百年史編纂室)、山口拓史(名古屋大学大学史料室)、神谷智(同)、羽田貴史(広島大学高等教育研究開発センター)、小宮山道夫(同大学図書館設立準備室)、菅真城(同)、故・佐藤秀夫(日本大学文学部)の皆さまに深い感謝の意を表した。大学沿革史の編纂は、今日の条件の下では、単に学内の営みであるばかりでなく、個別大学の垣根を越えた大学史研究の学問的蓄積と相互交流に立脚していること、またそれが単発的な年史の編集・刊行に留まることなく、大学史の研究教育、資料保存、情報公開に資する恒常的な体制構築に向けての大きなステップとなることについて視野を広げて下さったのはここにお名前を挙げさせていただいた先生がたである。

また、かつて本学一〇〇年史の編纂に携わられたOBのかたがたの貴重なご助言をこのたびの一二五年史編纂に活かすことができたのは有り難いことであった。永井秀夫(本学名誉教授)、岩沢健蔵(元本学農学部事務長)、秋月俊幸(元本学法学部助教、元附属図書館専門員)の三氏には編集室の発足時から、また高尾彰一(本学名誉教授)、古市隆三郎(同)の両氏には二〇〇一年度から編集室顧問を務めていただいた。『北大百年史』の執筆者の一員としても活躍された青山英幸氏(北海道立文書館文書専門員)には、大学史研究会で「組織におけるレコードとアーカイヴズ」という示唆に溢れるレクチュアをしていただいた。前田次郎氏(北海道大学図書刊行会)も一〇〇年史の制作に関わられた経験をとくに小史と写真集の編集作業に活かして下さいました。

学内では、「百一十五年史世話人会」の構成員と、「出版等専門委員会」、同幹事会の委員を務められた先生がたのお名前を別掲一覧に記して、感謝の意を表したい。また、編纂事業全般について事務局総務部企画室(旧総務部総務課企画室)、予算・契約面で経理部主計課ならびに第一契約課、編集室の運営全般について附属図書館の職員のみなさまにお世話いただいた。

最後に、編集室の発足以来五年間にわたり、北海道大学一二五年史編集の実務面を担い、責任ある仕事に献身して来られた井上高聡編集員に対して心から謝意を表したい。編集事務全般、とくに論文・資料編に収録されている統計・年表等の作成を担当した原口希（二〇〇二年三月まで）、山本美穂子（二〇〇二年四月から）両編集補助員にも深い謝意を表する。本書の制作では、論文・資料編に引き続き続いて岩橋印刷株式会社に今回もお世話になった。厚くお礼を申し上げたい。そして資料提供、調査、執筆、校正、照合などの面で、ここにお名前を挙げることできなかつたかたがたを含め、本書の刊行にご協力いただいたすべての関係各位に感謝の意を捧げる。

二〇〇三年十月三十一日

北海道大学百二十五年史編集室長 原 暉之

北海道大学創基百二十五周年記念事業実行委員会出版等専門委員会（一九九八年六月）

委員長 副委員長 \* 幹事会

附属図書館長

文学研究科・文学部  
教育学研究科・教育学部

法学研究科・法学部

経済学研究科・経済学部

理学研究科・理学部

医学研究科・医学部

医学部附属病院

歯学研究科・歯学部

歯学部附属病院

薬学研究科・薬学部

工学研究科・工学部

農学研究科・農学部

農学部附属農場

農学部附属演習林

獣医学研究科・獣医学部

原 暉之（一九九八年六月）二〇〇一年四月）

井上 芳郎（二〇〇一年五月）

白木沢旭児（一九九八年六月）

竹田 正直（一九九八年六月）二〇〇〇年三月）

\* 逸見 勝亮（二〇〇〇年四月）

田口 晃（一九九八年六月）

佐々木隆生（一九九八年六月）

石垣 壽郎（一九九八年六月）

\* 藤本征一郎（一九九八年六月）一九九九年三月）

\* 小柳 知彦（一九九九年四月）二〇〇三年三月）

\* 石橋 輝雄（二〇〇三年四月）

小山 司（一九九八年六月）

\* 福田 博（一九九八年六月）二〇〇三年三月）

\* 脇田 稔（二〇〇三年四月）

小口 春久（一九九八年六月）

野村 靖幸（一九九八年六月）

古市隆三郎（一九九八年六月）二〇〇〇年三月）

\* 山田 元（二〇〇〇年四月）

三島 徳三（一九九八年六月）

由田 宏一（一九九八年六月）

神沼公三郎（一九九八年六月）

高島 郁夫（一九九八年六月）

水産科学研究科・水産学部

言語文化部

地球環境科学研究科

国際広報メディア研究科

低温科学研究所

電子科学研究所

遺伝子病制御研究所

(旧免疫科学研究所)

触媒化学研究センター

スラブ研究センター

大型計算機センター

情報メディア教育研究総合センター

留学生センター

高等教育機能開発総合センター

先端科学技術共同研究センター

総合博物館

医療技術短期大学部

附属図書館

中尾 繁(一九九八年六月)

高橋 吉文(一九九八年六月)

山村 悦夫(一九九八年六月)

久保 美織(二〇〇〇年四月) (二〇〇二年三月)

竹中のぞみ(二〇〇二年四月)

\* 前野 紀一(一九九八年六月)

永井 信夫(一九九八年六月) (二〇〇一年三月)

八木 駿郎(二〇〇一年四月)

生田 和良(一九九八年六月) (一九九八年十月)

上出 利光(一九九八年十一月)

松島 龍夫(一九九八年六月)

望月 哲男(一九九八年六月) (二〇〇一年三月)

\* 山原 暉之(二〇〇一年五月)

山本 強(一九九八年六月) (一九九九年三月)

高井 昌彰(一九九九年四月)

岡部 成玄(二〇〇〇年五月)

米山 道男(一九九八年六月) (二〇〇二年三月)

関 道子(二〇〇二年四月)

\* 小笠原 正明(一九九八年六月)

荒磯 恒久(二〇〇〇年五月)

松枝 大治(二〇〇〇年五月)

中島 保明(一九九八年六月) (二〇〇二年三月)

中村 仁志夫(二〇〇二年四月)

山口 國雄(一九九八年六月) (二〇〇三年三月)

東 重俊(二〇〇三年四月)

百二十五年史世話人会（一九九七年十二月～一九九八年三月）

座長 原 暉之（附属図書館長）

構成員 吉岡 充弘（医学部教授）

副座長 田口 晃（法学部教授）

福田 博（歯学部教授）

構成員 南部 昇（文学部教授）

三島 徳三（農学部教授）

杉山 滋郎（理学研究科教授）

前野 紀一（低温科学研究所教授）

北海道大学百二十五年史編集室（一九九八年十月～二〇〇三年十月）

編集室長 原 暉之（一九九八年十月～二〇〇三年十月）

編集室員 三島 徳三（二〇〇〇年四月～二〇〇三年十月）

編集室員 竹田 正真（一九九八年十月～二〇〇三年三月）

池上 重康（二〇〇〇年五月～二〇〇三年十月）

古市隆三郎（一九九八年十月～二〇〇三年三月）

井上 芳郎（二〇〇一年五月～二〇〇三年十月）

白木沢旭晃（一九九八年十月～二〇〇三年十月）

編集員 井上 高聡（一九九八年十一月～二〇〇三年十月）

野村 靖幸（一九九八年十月～二〇〇三年十月）

編集補助 原口 希（一九九八年十月～二〇〇二年三月）

山口 國雄（一九九八年十月～二〇〇三年三月）

山本美穂子（二〇〇二年四月～二〇〇三年十月）

逸見 勝亮（一九九九年五月～二〇〇三年十月）

編集顧問 永井 秀夫（一九九八年十二月～二〇〇三年十月）

杉山 滋郎（一九九九年五月～二〇〇三年十月）

岩沢 健蔵（一九九八年十二月～二〇〇三年十月）

角 幸博（一九九九年五月～二〇〇三年十月）

秋月 俊幸（一九九八年十二月～二〇〇三年十月）

横井 敏郎（一九九九年五月～二〇〇三年十月）

高尾 彰（二〇〇一年四月～二〇〇三年十月）

田口 晃（二〇〇〇年四月～二〇〇三年十月）

古市隆三郎（二〇〇一年四月～二〇〇三年十月）

北大百二十五年史 通説編

二〇〇三年十二月十二日 印刷

二〇〇三年十二月二十五日 発行

編集 北海道大学百二十五年史編集室

発行 北海道大学

印刷 岩橋印刷株式会社